

仏頂尊と仏眼に関する問題

——その成立を中心として——

千 葉 照 観

仏頂尊は仏母としての仏眼と一雙をなすものとされている。また密教の教主である釈迦や大日にも仏母は存在するが、仏頂尊と仏眼のように強調されることはないようである。では仏頂尊を説く密教の中で、なぜ仏頂尊は特に仏眼を必要とし結びつくことになったのか。釈迦や大日の場合との相違は何なのか。このような問題意識を持ちつつ、仏頂尊と仏眼の成立について、更には仏眼の役割や効験等について考察したいと思うのである。

第一に、仏頂尊の成立に関する研究は既になされているが、一字仏頂輪王のボロン呪については、陀羅尼集経巻一にはないとされている¹⁾。しかしその巻一における「金輪印呪」「金輪仏頂」の解釈が、ボロンとの関連上特に問題となるようである。

まず陀羅尼集経巻一の一字仏頂法呪第三十二は高麗蔵にも「已上元本竟已下二印呪後加之」(T 18・192c)の細注がある

ので問題外としても、巻五の毘俱知菩薩阿唎茶法印呪に「一字仏頂功德無異」(同⁸³²a)とあることより、陀羅尼集経中に一字仏頂が説かれていたことは確実と見てよいであろう。そこで改めて陀羅尼集経巻一の「金輪」に注目してみると、金輪仏頂像法では、最初にその像法が説かれ、次に観世音菩薩が世尊の許しを得て、馬頭の威神力を示して一切の菩薩や諸の天神の神呪を悉く滅してしまふ。その時世尊は、仏頂三昧に入って帝殊囉施菩薩を現わし、大仏頂呪と小仏頂呪を説くと、馬頭の威神力は悉く滅してしまつた。そこで観世音菩薩は世尊の威神力を称え、更に世尊帝殊囉施を滅することのできる法はあるかと問う。すると世尊は「我有心呪名曰金輪。最尊為極更無過者。惟仏与仏乃能知之。是呪能滅帝殊囉施并呪等法」と説くのである。つまり金輪呪を最勝とし、帝殊囉施印呪よりも高く見ており、両者は別個のものと考えられる。また金輪呪を説く時の世尊は金輪仏頂の三昧に入っているはず

で、「惟仏と仏乃能知之」とあることや「仏金輪印呪」(同⁷⁸⁸a)との表現も別にあることより、金輪仏頂は仏と考えられ、対する帝殊囉施は明らかに菩薩である。したがって金輪仏頂像法では、金輪仏頂仏と帝殊囉施菩薩の二体が説かれていることになる。一方、真言の面より検討してみると、帝殊囉

施の大仏頂呪とは、卷一の最初に説かれる釈迦仏頂身印第一と考えられ、帝殊囉施金輪印呪第十三には唵「浮嚩那」嚩鉢^三莎訶^二(Om. bhruṇ. huṃ. svāḥa)とあり、帝殊囉施金輪仏頂心法印呪第十四には唵鉢^二毘藍毘藍^三嚩鉢^二莎訶^三(Om. bhruṇ. bhruṇ. huṃ. phet. svāḥa)とあり、bhruṇ. 即ちポロンが示されているようである。よって陀羅尼集経卷一において、金輪仏頂の真言にポロンが用いられ、卷五に見られる一字仏頂の名も、恐らくこの金輪仏頂と団体ではなからうかと思われる。

このよう考えると、帝殊囉施金輪とはどのような意味であるのかが問題となるが、本質的には卷一の金剛地印法における曼荼羅中の「釈迦金輪仏」と同じものと思われ、帝殊囉施の三昧に入った釈迦の金輪印呪と理解できるのではなからうか。

第二に、仏眼の成立についてであるが、既に菩提流支訳と真諦訳の金剛般若波羅蜜経の中に、五眼の一つとしての仏眼(Buddha cakṣus)が見られ、「我以仏眼觀」等の表現を以て法華経、無量寿経、無量義経等のいわゆる顯教經典中に散説さ

れ、密教經典中にも広く用いられている。また大品般若経卷十四仏母品に説かれる仏母の思想^③、あるいは蘇悉地経や蘇婆呼童子経に顯著に見出せる明妃の思想なども、この仏眼成立の思想的背景として考えられよう。

ところで、仏眼が仏頂尊と一雙をなすのは菩提流支訳が初出と言えるが、その前の陀羅尼集経に注目したいと思う。即ち卷一に釈迦仏眼印呪第二十五があり、卷二には一切仏眼印呪第九^{亦名仏母印}とあり、仏眉間白毫相印呪第十、仏牙印呪第十一の次に、又一切仏眼印呪第十二^{釈迦眼印同}とある。その細注は翻訳当初のものか否か不明であるが、一切仏眼印は釈迦仏眼印と同じく、また仏母印とも名づけられていたことになる。それらの真言は菩提流支訳以後の仏眼呪とは異なり、またそれらの印呪の前後に仏頂尊との関係は見られず、仏頂尊の全く説かれていない卷四にも一箇所(同^{824a})説かれている。更に印呪の功德についても眼病の直ることが強調されているようである。しかし釈迦仏眼印呪に「作仏眼印。誦前大呪。得身清淨眼根清淨。若至誠受持仏眼印呪。亦得具足五眼清淨」とあり、前大呪とは先述の大仏頂呪に同じと思われることより、仏眼印を結んで仏頂心呪を誦すと、身清淨と眼根清淨が得られ、また仏眼印呪を受持すれば五眼清淨が得られるとなる。よってここに、仏頂尊と仏眼との直接的関係を見ることができると思うのである。また釈迦仏眼は先の金剛地

印法における曼荼羅中の一尊として位置づけられていることにも注意すべきであり、更に金剛母摩麼羅菩薩、觀世音母の名が見えるが、これらは蘇悉地經そして都部陀羅尼目に至ると、三種部母とされるものである。

これまでのところより、五眼の一つとしての仏眼が密教化されて尊格を与えられ、仏頂尊と二尊をなす仏眼菩薩として形成されるに至る過渡的段階のものとして、陀羅尼集經の釈迦仏眼を考えたいと思うのである。

第三に、仏眼の役割や効驗等について、菩提流志訳の一字仏頂輪王經を基礎資料として検討したい。まず卷一では、一字仏頂輪王の呪であるボロンが説かれ、世尊がその大威徳を現わすと、その会の有情や一切諸大菩薩・弥勒等も瞻仰することができず、觀世音菩薩と金剛密跡主菩薩は、仏の威神力のために忽ちの内に地に倒れてしまった。そこで世尊は觀世音菩薩等を目覚めさせるために、威身を隠して如来相にもどり、一切仏眼大明呪母を説くと、觀世音菩薩等は目覚めて地より立ち上がったとある。そして仏眼大明呪母は「為息可畏難調伏者。為欲成就出世世間一切仏頂大輪王呪一切事位滅諸諍論。是呪乃是一切諸仏種族母呪。復是一切諸大菩薩生養育母」(T 19・227a)とあり、調伏や仏頂輪王呪を成就させようとする働きがあり、一切諸仏種族母呪、一切諸大菩薩生養育母とある如く、いわゆるシャークティに相当する性格を以て

説かれているのである。また先の文に続いて、一字仏頂輪王呪の威神は最尊最特であるから十地の菩薩も怖れるので、この一字仏頂輪王呪を誦する時には、先ず仏眼呪を誦してから輪王呪を誦し、また仏眼呪を誦すれば安隱が得られる、と説いているのである。これらによって、仏頂尊になぜ仏眼が必要であったのか、そして両者が一尊をなすに至る理由や、仏眼の基本的役割や性格等を窺い知ることができよう。

更に仏頂尊と仏眼との関係は多岐にわたり、様々に説かれているようである。即ち卷二の一切頂輪王心呪では護身法として、「若仏種族呪中作法。仏眼呪上。是五頂輪呪中作法。亦仏眼呪為最爲上」(同23b)とある。仏部には仏眼とする考え方はここを初出とし、三種部母の形成上注意すべきである。同じく卷二の呪数珠呪では、前述の一切頂輪王心呪を加えても成就しない場合には、仏眼呪を加えて三種の呪を平等に誦せとある。この場合の仏眼呪の効驗を仏頂より高く見る説もあるが、卷三の如来眼印呪之十六では、如来眼印は「能作大益滅諸重罪。成進一字頂輪王呪者悉地……若人誦持一字頂輪王呪……不成証者。則応加此大明王呪。齊等隻誦滿二十萬遍。決定成就一字頂輪王呪最上悉地」(同24c-24d)とあり、頂輪王呪が成証しなければ、この仏眼呪を加えて等しく双べ誦すと、一字頂輪王呪の最上悉地を決定成就するとある。このような仏頂輪王呪を成就させようとする仏眼の役割

は前述するところであり、呪数珠呪の場合も仏眼呪をより高く見ているわけではないと思うのである。次に巻四では結界法において、摧碎頂輪王印呪や一切頂輪王心印呪と共に仏眼印呪が説かれ、あるいは灌頂において、一字頂輪王呪で受法の人を呪し、仏眼呪にて浄白練を呪し、また布瑟置迦火壇の法では一切頂輪王菩薩を請い、扇底迦法では仏眼呪を誦すところあり、請喚発遣の時にはみな一字頂輪王呪や仏眼呪等を誦すところとある。

以上のように、頂輪王呪の最上悉地を決定成就させようとする。摧伏、滅罪によって得る安楽、安隱、そして護身法、結界法、息災法としての効驗乃至役割や性格は、後の仏頂尊と仏眼を説く経軌の基本になっているようである。

第四に、以上の論考を踏まえた上で、釈迦と大日の仏母との相違について考察したい。まず胎藏界の場合には、釈迦は釈迦院において能寂母を仏母とし、大日は遍知院において虚空眼明妃を仏母としているが、その仏母としての存在は特に強調されることはないようである。これは胎藏界そのものが母の胎内の如くであり、阿字本不生の思想とも重なって、胎藏界大日そのものが根源であり、能生養育の作用があるためと考えられる。一方、金剛界の場合には、四波羅蜜菩薩が生成養育の母とされるが、基本的に根源としての金剛界大日の内心より三十七尊が出生されるのであり、大日の仏母は無い

ようである。これに対して仏頂尊の場合には、釈迦や大日が仏頂三昧に入って、その曼荼羅や威神力等を説き明かしたのであり、一切仏菩薩は撰入されており、能生の根源とはなり得ないのである。こうして仏頂尊では、その威神力を強調することに急となり、十地菩薩も瞻仰することができないとした時に、それまでの仏母や明妃の思想と結びつき、一雙のものとして展開することになったと考えるのである。

- 1 三崎良周『台密の研究』第六章仏頂系の密教 三 仏頂輪王について
 - 2 巻十二の普集会壇下方莊嚴十六肘図の中にも釈迦金輪仏頂が見える。(T18・895a)
 - 3 大日経義釈巻四(統藏36冊312右下) 疏卷五(T39・631c)では、虚空眼明妃について「仏母饑如般若経仏母品中広説」とある。
 - 4 大日経卷一(T18・7b1c)と義釈卷四(同314右下) 疏卷五(同633c)による。
 - 5 大日経卷二(同15b)と義釈卷七(同311右下) 疏卷十(同685a)と注3による。
 - 6 金剛頂瑜伽三十七尊出生義に「由四如来智。出生四波羅蜜菩薩焉。蓋為三際一切諸聖賢生成養育之母」(T18・298a)とある。
 - 7 一字仏頂輪王経卷一に「此頂輪王。是真一切如来安住最勝三摩地身」(T19・227b)とあり、一字奇特仏頂経に「世尊入一切最勝三摩地王。一切如来入一切三摩地最勝三摩地王」(同287a)「十方一切如来皆入頂輪王真言」(同305c)とある。
- △キーワード▽ 仏頂尊、仏眼、仏母

(大正大学総合仏教研究所員)